時評

分断を越えるために

屋良健一郎

「現代短歌」三月号の特集は〈分断は越えられるか〉。一月に現代短歌社主催で福島で行われた「分断をどう越えるか～福島と短歌～」をベースに様々な「分断」をとりあげた意欲的な特集だ。同誌収録のパネルディスカッションで、齋藤芳生は本田一弘『磐梯』の「福島はフクシマでねぇ放射性物質ふふむ空の青さよ」を引き、生活者として過す福島とカタカナ表記のフクシマとの乖離を指摘する。また、本田自身も自作の「さんぐわつじふいちにあらなくみちのくはサングワヅジフイヂニヂの儘なり」を挙げ、「さんがつじゅういちにち」や「3・11」が「私たちの感覚とはずれたところで動いていることのように思えます」と福島に生きる者の実感を述べる。現地の生活者の感覚を私のような外の人間がどれだけ理解できているのだろうと改めて考えさせられた。

この特集では山田航「『貧困の抒情』のために」も印象的だ。山田は「虐待や家族不和を題材とした作品」が注目され始めた近年の歌壇の状況に対し、それらの作品の可能性を認めた上で「『今さらそんな程度のことで騒ぐのか？』という印象も抱かざるをえなかった。そんなテーマは他のどんな文化芸術もずっと前に通過済みだったからだ。言ってしまえばつい数年前まで、短歌の世界には『ひとり親家庭』や『不和を抱えた家庭』は、（そうした家庭を抱えた歌人も現実にいたにもかかわらず）存在しないことにされていた」と述べる。歌や批評が狭い視界しか持ち合わせていないことへの危惧と読んだ。貧困を意識的に見て、リアルに感じることが創作者にとって大切だと指摘し、「別の階層」に跳び込んでいく「アクティビティ」の重要性を山田は説く。

貧困の問題と重ねるのは短絡的だろうが、山田の文章を読んで基地詠のことを思い出した。特集の拙稿でも触れたが、沖縄の歌人の基地詠では、ゲート周辺の街の様子や基地関連の収入を得る人のことはあまり詠まれない。経済的に基地との共存を選んだ（選ばざるを得なかった）人達の考えや苦悩を短歌が発信することはあまりないのだが、小説家はこれらをきちんと描いている（目取真俊『虹の鳥』や「新潮」二〇一七年二月号の大城立裕「辺野古遠望」など）。これもまた、山田の言う「他のどんな文化芸術もずっと前に通過済み」のものの一つであろう。田中綾「海の向こうの戦争」（『権力と抒情詩』所収）が、開高健『ベトナム戦記』にも触れながら、反戦詠が様々な立場の人の「こころ」を充分に描けていないのではないかと指摘したのも思い出される。自分と違う立場・環境の人々の「こころ」に思いを致す短歌が決して多くないのは、短歌の私性の強さによるのだろうか。あるいは三十一音という短さ、はたまた歌人の職業などとも関係あるのか。

短歌は限られた範囲しか灯せていないのかもしれない。それを自覚した上で灯を広げていきたい。そう思う時、ディスカッションでの高木佳子の言葉に立ち止まる。「マスコミは糸口を探しに来るのではなく、ある編集意図をもって取材に来られるわけです」。「編集意図」を排して目の前のことを、多様な生活者の様子を詠える歌人になりたい、と思うのである。